

グリム・メルヒェン「漁師とその妻」における願望の大胆さ

著者	ハンス＝ヨエルク・ウター（著），大野 寿子（訳）
著者別名	edited by Hans Jorg Uther, translated by Hisako Ono
雑誌名	国際文化コミュニケーション研究
巻	2
ページ	121-155
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011216/

翻訳

グリム・メルヒェン「漁師とその妻」における
願望の大胆さ

ハンス＝ヨエルク・ウター (著)

大野 寿子 (訳)

1. テクスト史

魔法メルヒェンの成立史は複雑である。¹ ポンメルン地方ヴォルガスト出身の画家フィリップ・オットー・ルンゲ (Philipp Otto Runge, 1777-1810) が、「漁師とその妻について」(Von den Fischer un syne Fru [KHM19]、以下「漁師メルヒェン」と略記) のメルヒェンを、「ネズの木について」(Von dem Mahandel Bohm [KHM47]) と共にフォアポンメルン方言で、1806年1月7日付けで二重に書き留めた。彼はそのテキストの1ペアを、弟のグスタフ・ルンゲ (Gustaf Runge, 1781-1841) に送付した。いずれにしてもこのことを彼は、1806年1月7日付けの手紙の中ですでに予告していたのだが、送付の正確な日付は不明である。彼は他方、ある1つの計画を1808年1月24日に、ハイデルベルクの本屋兼出版者のヨハン・ゲオルク・ツィンマー (Johann Georg Zimmer, 1777-1853) へと送付した。同社より先んじて出版された『少年と魔法の角笛』(Des Knaben Wunderhorn, 1806-1808) 第1巻受領後のことだ。この時送られたもう一方の手書き原稿のペアは、もはや発見不能となっている。ツィンマーはその2つのテキストを、クレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano, 1778-1842) に渡した。ブレンターノ

¹ 伝承に関しては特に以下を参照のこと。Wesselski, A.: Deutsche Märchen vor Grimm 2. Brünn 1942, S. 55-62; Neumann, S. A.: Nachwort. In: Runge, P. O.: Von den Fischer un syne Fru/Von dem Mahandel Bohm. Rostock 1984 (Hamburg 1984), S. 41-47; Rölleke, H.: „Wo das Wünschen noch geholfen hat“. Gesammelte Aufsätze zu den „Kinder- und Hausmärchen“ der Brüder Grimm. Bonn 1985, S. 161-174; Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen 1-4. ed. H.-J. Uther. München 1996, hier Bd. 1, S. 39-43 (Kommentar zu Nr. 19).

ノはそれを、アヒム・フォン・アルニム（Achim von Arnim, 1781-1831）に転送し、ルンゲの同意を得て「ネズの木の話」の方を、彼が創設した「隠者のための雑誌（隠者新聞）」（Zeitschrift für Einsiedler, 1808年7月）に掲載した。つまり彼は「漁師メルヒェン」の方を——彼の伝えるところによれば——取り下げようとしたようだ。というのも、この話が彼には、「本格的な子供のメルヒェン（童話）」とは思えなかったからだ。²

このテキストを、子供のために構想されたメルヒェン集に掲載することに懸念を示していたのは、グリム兄弟と同名であり、アヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノによる民謡集『少年と魔法の角笛』への寄稿者でもあるアルベルト・ルートヴィヒ・グリム（Albert Lud[e]wig Grimm, 1786-1872）であったが、アルニムと対立していたわけではない。1809年、すでに彼は自身の『子供のメルヒェン集』（Kindermärchen）の中で、同話の標準ドイツ語バージョンを公表していた。ルンゲのテキストのことを間違いなく知った上でのことあり、この収集はヤーコプ・C・B・モアア（Jacob Christian Benjamin Mohr, 1778-1854）とツィンマーの手で、ハイデルベルクの『少年と魔法の角笛』と同じ出版社（Mohr & Zimmer）から刊行されている。³ その標準ドイツ語バージョンは、方言から標準ドイツ語へのそのままの翻訳である点に触れずとも、テーマと構成の面で、ルンゲ・テキストとの著しい共通性を示していた。A・L・グリムは、自分が独自に仕上げた原本の方を単に使用したにすぎない。その冒頭では、口やかましい結婚相手であり、夫を怠惰のかどで咎める妻の不平不満が描写されている。漁師の人物像をA・L・グリムは、ルンゲよりも積極的に描写している。ハンス・ドゥーデルデ（Hanns Dudeldee）という名の（A・L・

² Steig, R.: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. Stuttgart/Berlin 1904, S. 262.

³ Grimm, A. L.: Kindermärchen. (Heidelberg [1809]) Hildesheim 1992, S. 79-92; アヒム・フォン・アルニムと彼の『少年と魔法の角笛』周辺におけるアルベルト・ルートヴィヒ・グリムとその役割に関しては、E・シャーデ（E. Schade）のあとがき（同書、209*-237*頁）参照のこと。

グリムの描く) 漁師は、突然浮かび上がってきた魚を見つけたとき、何が欲しいかというその魚の問いかけに、1軒の田舎別荘を所望する。さらに連発する妻の願望を夫は拒み続けるが、それも無駄に終わる。自分の妻の分別に訴えるというやり方で、漁師の夫としての役割が、はるかに強烈に浮き彫りにされているのである。ちなみに、教皇になりたいという妻の願望は存在しない。⁴

グリムの『子供と家庭のメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen, KHMと略記)初版より前、ヨハン・グスタフ・ゴットリーブ・ビュッシング(Johann Gustav Gottlieb Büsching, 1783-1829)の^{コレクション}収集の中に漁師メルヒェンが存在する。⁵このテキストは、間接的にルンゲに源を発している。1808年5月、ビュッシングの同僚フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン(Friedrich Heinrich von der Hagen, 1780-1856)により施された写本が、ブレスラウのドイツ文学者にしてメルヒェン収集者であるビュッシングの手に渡った。フォン・デア・ハーゲンとは、1811年にビュッシングがブレスラウで役所に1811年に就職して以来、懇意にしていたのだ。これらすべての印刷ならびに引き続いての出版は——例えば子供のメルヒェンと呼ばれたカール・フィリップ・コンツ(Karl Philipp Conz, 1762-1827)の韻文物語『ハンス・エンテンデ』(Hans Entendee)⁶等——多読のグリム兄弟には、自分達のメルヒェン^{コレクション}収集出版に取りかかる前にもう知られていたのではなかろうか。ヴィルヘルム・グリムは、1812年9月26日付けのアルニム宛ての手紙の中で、ビュッシングによる「漁師メルヒェン」の活字化について、意見をこう述べていた。「室内用便器(Pißpott、以下小便壺と記す)につい

⁴ 『子供のメルヒェン』の改版プロセスにおけるテキスト改変と、さらに同時代的な出版については上掲書 244*-252*頁参照のこと。

⁵ Büsching, J. G.: Volks-Sagen, Märchen und Legenden. Leipzig 1812, Nr. 58. 1補遺におけるパラレルな復刻も参照のこと。

⁶ Poetischer Almanach für das Jahr 1812. Bes. durch Justinus Kerner. Heidelberg [1811], S. 50-54.

てのルンゲ版メルヒェンを、ハーゲンが君〔＝アルニム〕から手に入れたのかどうか私に教えてくれ。私達もあのテキストを披露するだろうし、あのテキストをそこ〔＝君〕から手に入れたのだという体裁は望まないのだ。』⁷

1812年のKHM第1版に収められたテキスト（19番）が世に出る前、ルンゲと同じボンメルン出身でベルリン在住のグリム・メルヒェンの出版業者ゲオルク・アンドレアス・ライマー（Georg Andreas Reimer, 1776-1842）が、少なくとも正書法の観点からこの方言形式を校正したがった。⁸ グリム兄弟が1810年にブレンターノに送付した手書きのメルヒェン合本では、当該テキストは既刊テキストであり当然欠けていたのである。1812年10月30日にライマーは、ヴィルヘルム・グリムへとそれを伝えることによって、自分の振る舞いを正当化した。ライマーは、「あらゆる入念さで、疑わしい表現1つ1つをデーネルト（Dähnert）の低地ドイツ語辞典と照らし合わせ、その上私〔＝ヴィルヘルム〕になお、思慮分別のある友人としての助言と援助を施したのだ。』⁹ こうしてこの書き換えられたテキストが、ヴィルヘルム・グリムにより再版の度ごとに微細な改変がなされても、長いことKHMの中に留まった。さらに当該テキストは、1825年以降に出版されることとなる、KHM「小さな版」（Kleinere Ausgabe）の13番としても採用されたのだ。そこには、1823年に英国で出版されたグリム・メルヒェンの翻訳セレクト版を手本に、KHM二巻本（1819年の第2版）から50のテキストがヴィルヘルムの専門的観点より選出されており、極めて安価で入手可

⁷ Arnim/Steig (wie not. 2) S. 214.

⁸ Steig, R.: Zur Entstehungsgeschichte der Märchen und Sagen der Brüder Grimm. In: Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Litteraturen 107 (1901) S. 277-310; ders.: Literarische Umbildung des Märchens vom Fischer und seiner Frau. In: Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen 110 (1903) S. 8-19.

⁹ Schoof, W.: Neue Beiträge zur Entstehungsgeschichte der Grimmschen Märchen. 2: Zur Verlegergeschichte der Grimmschen Märchen. In: Zeitschrift für Volkskunde 52 (1955) S. 112-143, hier S. 115f.

能であった。ルンゲのテキスト「ネズの木の話」(23番)と「漁師の話」(13番)が、ほぼ唯一の方言メルヒェンとしてそこに存在したのだ。

漁師メルヒェンのテキスト形式上のより大きな改変は、1843年のKHM第5版においてようやく行われる。ヴィルヘルムは、ハンブルク方言による漁師メルヒェンのグリム版初稿をさらに自由に書き換えた、画家ルンゲの兄ダニエル・ルンゲ (Johann Daniel Runge, 1767-1856) の改訂版を、これまでのテキストと置き換えた。¹⁰ ルンゲに依存したあらゆる方言版と比較すると、多様な写しと復刻のため、正書法上の相当な相違を確かに示してはいるが、内容的な変更は結果として生じていない。¹¹

さて、このテキストの文学作品上の数ある翻案の中では、ギュンター・グラス (Günter Grass, 1927-2015) の小説『ヒラメ』(Butt, 1977) が最も有名となった。この作品の中で作者は、話をする魚のモチーフをテーマとして取り上げている。グラスの作品では、ヒラメが解放のお礼に、一人称の語り手(主人公)が希望した不死を与え、その語り手の数世紀にわたる人生に、会話のパートナーとして付き添うのである。

2. 他の民間メルヒェン(民話)の鑑としての漁師メルヒェン

とりわけ漁師メルヒェンは、その構成や言語、および芸術性豊かな形姿において、グリムの理想のメルヒェン^{タイプ}型にふさわしい。ヤーコブはもう早い時期に、ある民間伝承雑誌の創刊時、「ドイツの詩と歴史の友」に寄せた1811年1月22日付けの活字化されなかった声明において、まずルンゲのメルヒェンを1話、あるいは他のいくつかの(漁師メルヒェンの)原型を活字化することを表明した。「我々が1年を通して、この手のメルヒェンの10話でも都合よく受け取るならば、それだけでもう苦勞するだけの価値

¹⁰ Runge, P. O.: Hinterlassene Schriften 1. ed. von dessen ältestem Bruder [D. Runge]. Hamburg 1840, S. 430-435.

¹¹ 後述の【3つのテキスト】参照のこと。

はあるだろうに」。¹²

このメルヒェンは数多くの会話と、漁師と魚との出会いを導く、型通りに反復する四行詩によって特徴付けられている。色彩と天候の象徴性が結合した劇的なストーリー構成は、よく設計された印象を確かに与えているようである。しかし、その構成においては厳格であり、願望のヒエラルヒーに基づいている。その諸願望とはまず、居住環境の変更（小便壺、漁師小屋、城、宮殿）であり、願望のエスカレートに伴い社会的昇進が要求されるのである。確かに現実では、恐らく架空の女性教皇ヨハンナ（Johanna）の後は、女性教皇など一度も存在していなかったのであるが、漁師の妻は国王と皇帝の次には教皇（！）になるという、この地上のいわば宗教的高官の最高職位に就くことを欲する。緊張のアーチは、それによってより一層上昇し、妻の最後の願望「私は生きた神になりたい」が、息も詰る貧困を象徴する狭隘な住居「小便壺」という本来的な「現状」を回復させ、急降下〔＝急激な失脚〕という結果をもたらすのである。「すると彼らはその日のうちに小屋の中に座っていた。」

このストーリー展開は色彩の象徴性を伴い、願望の危険性をその度予告している。色彩の多様性は、^{スペクトル}「（白く）ピカピカ」から「黄色や緑」、「紫とグレーとダークブルー」、「ダークグレー」、「真っ黒でドロドロ」、「強い稲妻のように真っ赤」と変化して、「真っ黒」にまで達している。この水と空の色彩は、妻が発する思い上がった願望表象の諸段階を特徴付けている。妻の絶え間ない不満に、夫は抗えない。彼は、妻のパートナーでも対等な相手でもない。ぴくつきながらも彼は「私はすべてが思い通りのなるとは思わない」と異議申し立てをして、「ヒラメは気を悪くするだろう」と警告するが、無駄である。そうして彼には、聞き入れられないまま放置され、自己疑念だけが残る（「彼の心は重かった」）。彼の感情は、悲観から途方

¹² Bolte, J./Polivka, G.: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 4. Leipzig 1929, S. 423f.

もない恐怖へと膨れ上がっていくが（「彼は恐れおののいた」）、拒絶の態度を表明することがどうしても彼にはできないのだ。

『メルヒェン本』（Märchenbuch）を1844年より刊行しているルートヴィヒ・ベヒシュタイン（Ludwig Bechstein, 1801-1860）が、グリム兄弟のテキストも集録したのは周知の事実だが、「漁師とその妻について」の話は、もう1つのルンゲ・メルヒェン「ネズの木について」と共に除外した。¹³ ベヒシュタインによって集録されたテキストはすべて、標準ドイツ語で執筆されていたため、恐らくこの方言採録が、彼には気に入らなかったのだ。しかし彼は、この主題設定には興味があった。ネズの木のメルヒェンのバージョンの1つが、『新しいドイツのメルヒェン本』（Neues deutsches Märchenbuch, 1856）にようやく集録された一方で（第3番「嘆きの歌」）、彼は漁師メルヒェンの大変逸脱したバージョンを「酢壺の中の夫と妻」（Mann und Frau im Essigkrug）というタイトルで、『ドイツのメルヒェン本』（deutsches Märchenbuch, 1845）にすでに再録していた（第42番）。その際に彼は、アルザスの詩人アウグスト・シュテーパー（August Stöber, 1808-1884）の、1842年の方言版テキストを拠り所としていた。シュテーパーは、ヴィルヘルム・グリムに、「ヘンゼルとグレーテル」メルヒェン導入部の新しい着想を与えた人物でもあった。外国で思案されたものの借用は、当時としては珍しくはなかった。我々が知っているような厳格な著作権など、所詮は存在していなかったのだ。それに加えて、メルヒェンは他のフォルクスボエジー「民の詩」（Volkspoese）同様自由に裁量され、個別の作者を持たず、繰り返し新しい生せいの中に蘇生することができるという、ロマン主義的な理念

¹³ Bechstein, L.: Deutsches Märchenbuch. Nach der Ausgabe von 1857, textkritisch revidiert und durch Register erschlossen. ed. H.-J. Uther. München 1997, Nr. 55; vgl. Kallenberger, P.: Mann und Frau im Essigkrug. In: Vom Menschenbild im Märchen. ed. J. Janning u.a. Kassel 1980, S. 91-105; Schmidt-Knaebel, S.: Ludwig Bechstein als Märchensammler. Die vier Anthologien im Überblick. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 37, 130 (2003) S. 137-160.

が優勢だった。ベヒシュタインは、以下のような発言をしている。「メルヒェンは常に変化し続けている。特徴的な故郷固有のイントネーションや色彩がそうであるように、メルヒェンは時には個々の特性を失ったり放棄したり、時には新しい特性を獲得したりする。例えば本来的なチロルの民間メルヒェン（民話）の中には、ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟の『子供と家庭のメルヒェン集』^{コレクション}収集に収録されているもののように感じられる話が多くある。しかしそれらは、そこ [=チロル] では自明のものであり、それらの話が所属している地域のナショナル・タイプを誇示しているのである。」（1856年）

さて、シュテーパー／ベヒシュタイン版テキストに再び耳を傾けてみよう。こちらはグリム版テキストよりもはるかに短く、その作曲風の構成は芸術性が比較的乏しい。

昔、1人の男と女がおり、長いこと酢壺の中に一緒に住んでいた。とうとう彼らはそれに嫌気がさしてしまい、夫が妻にこういった。「私たちが酸っぱい酢壺の中に住まなければならないのは、おまえのせいだ。私たちがここに住みさえしなければ！」しかし妻はこういった。「いいえ、これはあなたのせいです。」こうして2人は喧嘩をして、互いに罵り合いはじめた。そして酢壺の中で、片方が片方を追いかけた。ちょうどそのとき、金の小鳥が1羽、酢壺にやって来てこういった。「あなたたちはいったいどうしたというのですか？」

「ああ」と妻はいった。「私たちは酢壺にもううんざりなのです。私たちは別の人たちのように暮らしてみたいのです。そうすれば私たちは喜び満足するでしょう。」そこでその金の小鳥は2人を酢壺から連れ去り、新しい小さな家へと導いた。その裏には、小さなかわいい庭があった。鳥は彼らにこういった。「さあこれはあなたたちのものです！これで仲良く満足して暮らしてください。もしあなたたちが私を

必要とするときは、3回手を叩いてこう叫びさえすればいいのです。

日光の中の金の小鳥！

ダイヤモンド広間の中の金の小鳥！

至るところの金の小鳥！

そうすれば私があります。」

そしてこの話はこう終わる。

そこで妻はこういった。「私たちは皇帝と皇后になる。」

「いや！」と夫はいった。「私たちは教皇になる！」

「ほおう！それでは不十分です！」と妻は夢中になって叫びこうった。

「私たちはむしろ神になりたい！」

しかし、妻がそのことばをいい終わるか終わらないうちに、猛烈な暴風が吹いてきた。そして、まるで輪転花火のように転がり煌く目をした大きな黒い鳥が1羽、窓から中へと飛び込んできて叫んだので、すべて事物が揺れだした。「ならばおまえたちは酢壺の中で酢漬けになるがいい！」

パチン。そうすると、あらゆる壮麗さが消えうせた。そして夫と妻は2人とも、再び自分たちの狭い酢壺の中に座っていたのだった。こうして今も2人は座っており、最後の審判の日までその中に留まり続けるのだろう。

これが、手に入れたものに決して満足しない人間に対する教訓なのである。

メルヒェンの結末は、ベヒシュタインもグリムも同じである。ただベヒ

シュタインの方が、彼の多くのメルヒェンに典型的な、事態の皮肉な切迫感を巻き起こしている。「こうして今も2人は座っており、最後の審判に日までその中に留まり続けるのだろう。」いつもの楽観的な基調とは違い、ハッピーエンドに欠けている。つまり「悪銭身につかず」なのである。このメルヒェンは、人間のより高きものへの欲求の模範的象徴であるが、その欲求は転落に終わる。というのも7つの大罪の1つである傲慢(*superbia*)とは、罰せられないままであってはならないものだからである。「傲慢は転落の前にやってくる」等、同様のことが多くの諺で語られている。この漁師のメルヒェンは、道徳的でとりわけ宗教的な規範を高度に具現化しており、その規範によりこのメルヒェンそのものが、教訓物語に近接してゆくのである。そのためこのメルヒェンは、グリム兄弟によって模索された家全体のための教育の書に、模範テキストとしてぴったりとはまったのである。¹⁴

しかしながら相違は顕著である。グリムの場合の夫の役割は、すべてを妻の気に入るようにしようとする自立していない者にして耐え忍ぶ者であり、たとえ疑念が芽生えたとしても、それを自分の妻に対してきっぱりといい聞かせることができない。グリム兄弟自身が、この出来事を次のように解説している。「自分の夫を高い階位へと誘う妻のモチーフは、確かに極めて古く、エヴァ [=イブ]、王妃タナキル (*Tanaquil*, *Livius* 1. 47) からマクベス夫人にまで至る。¹⁵ それに対してシュテーパー／ベヒシュタイン版においては、決定的な変更が存在する。願ってもないパートナー役として魚の代わりに遭遇する鳥が、最終的に忍耐力を喪失し、2人の存在の最初の状態へと再び「回帰」させるまで、満足を知らず自らの願望をだんだん高く迫り上げるのは、夫妻双方である。そして最後に、この「回帰」

¹⁴ この件に関しては、グリム／ウター（注1参照）のあとがき（Bd. 3, S. 242-249.）を参照のこと。

¹⁵ *Brüder Grimm: Kinder- und Haus-Märchen*. Berlin 1812, S. XI.

によって環が閉じるのである。

貧困と富裕と物理的財産との理性的（あるいは非理性的）関係性というものを、大変多くのメルヒェンが題材としている。しばしば人々はその中に、1つの中心思想のようなものを見ようとし、このメルヒェンが、無名の庶民の男性のユートピアであることに帰結した。¹⁶ 今や漁師メルヒェンにおいては、限界というものが示されるのである。

古代（ギリシャ・ローマ古典）以降、ヨーロッパ人には、貧しくも満足している人間についての様々な物語が知られていた。突然獲得した富にうまく対処することができず、たくさんの金と財産で何をなすべきか苦慮し、その富が自分から剥奪されたり、その富を贈与者の手に再び委ねた時に喜ぶ者についての話である。模範的な物語は他にもあるが、特にクセノフォン（Xenophon）、ホラティウス（Horaz）、ストバイオス（Stobaios）の作品に見受けられる。このような表象は、中世における中心的な実例集（Exempelsammlungen）に仲介されてさらに、近代初期の笑話本、娯楽本、説教集に至るまで伝承された。「民意（世論）」（Volksmeinung）よりも、支配階級の要望にふさわしいと思われる教訓めいた物語の例として、ここでは、ホラティウスの『手紙』（1, 7, 46-98）からの物語が引き合いに出されよう。そこでは、貧しくも満足している1人の男ヴルテイウス・メナ（Vulteius Mena）について語られる。ある日、執政官（古代共和制ローマのコンスル）マルキウス・フィリップス（Marcius Philippus）がその男に土地を贈った。その時以来ヴルテイウスは、彼からの贈り物を放棄し、自分の昔の生き方へと戻る許可を執政官に頼むまで、ただただ不安を抱き続けただけだった。「金だけではまだ幸せにはならない」と物理的な富に懐疑的な態度を取りつつ、このような物語では代わりに、特に自身に対する

¹⁶ Zum folgenden vgl. Uther, H.-J.: Hans im Glück (KHM 83). Zur Entstehung, Verbreitung und bildlichen Darstellung eines populären Märchens. In: The Telling of Stories. Approaches to a Traditional Craft. ed. M. Nøjgaard u.a. Odense 1990, S. 119-164, hier S. 124.

満足の表明としての内面的幸福感を手に入れる。幸福な貧困者のこのような配置について特徴的なのは、国際話型ATU754「幸福なる貧困」(Glückliche Armut)¹⁷の口承のバリエーションの中に、「物理的に寡欲な者が、安らかに眠りうれしそうに歌う」という描写が見受けられるということだ。ポルトガルのあるバリエーションでは、彼はその上ギターを奏でるというやり方で、自分の息災を表明する。啓蒙主義が、説教話やその他の「^{おはなし}小話」(Märlein)を批判し一掃するという結果をもたらした一方で、幸福な貧困者のような表象は、古い実例集の編者が、著作権版権取得者としてもはや引き合いに出されずとも、さらに流布し続けた。同様の素材や内容は、20世紀への転換期に生じつつあった子供と児童のための文学においても見受けられる。キリスト教的志向性を有する書物や寓話本が、明らかに人間的な根本認識として、この主題を取り上げている。誰もが自身の立場に留まり、不満や不遜から高位を欲すべきではなく、まさにルターという多様な社会的秩序（地位階級）と貧富の配分は、神より与えられたものとして正当化されるということが説かれたのである。¹⁸ こうしてこのルンゲ／グリム版メルヒェンが、独特のやり方で社会的地位に変更不能という呪縛をかけるタイプの物語の伝承の列へと加わるのである。

グリムの場合ならことばを話す魚との偶然の接触¹⁹、ベヒシュタインの場合なら鳥や他の贈与者といった不思議な動物との偶然の接触が、この夫婦のメルヒェンに特徴的な物質的個人的幸福感を目的指向的に導くわけで

¹⁷ ヨーロッパでは中世以来よく記録されている。 vgl. Uther, H.-J.: The Types of International Folktales (FFC 284/285/286). Helsinki 2004, Nr. 754.

¹⁸ Vgl. auch das Grimm-Märchen „Die ungleichen Kinder Evas“ (KHM 180).

¹⁹ 予期せぬ漁獲（ここでは閉ざされた容器の中の精霊）のモチーフについては、1857年刊行『子供と家庭のメルヒェン集／注釈巻』（29頁）でヴィルヘルム・グリムによりすでに1856年段階で言及されている、『千夜一夜物語集』を典拠とする「漁師の話」(Histoire du pêcheur) 参照のこと。vgl. Textabdruck in: Die schönsten Märchen aus 1001 Nacht. ed. H.-J. Uther. Kreuzlingen/München 2000, S. 20-34 (Die Geschichte des Fischers mit dem Geiste).

はない。双方のストーリーの担い手は、自分たちの不遜ゆえに挫折する。度を超え高まった願望に対する罰は、後のヨーロッパ版では、夫婦が動物（フクロウ、クマ、イヌ）の姿に変えられるというかたちで、夫婦自身にも与えられる。²⁰

妻の傲慢と実現不能な願望は、しばしば主題化されている。例えば、「ツグミの髭の王様」（KHM52）メルヒェンの傲慢で高慢な妻が想起されうる。あるいは、「貧乏人と金持ち」（KHM87）メルヒェンのように、金持ちだが客あしらいが悪く、利己心のみに縛られ、軽率に願望を表明し、それをも無駄にしてしまう夫婦が想起されうる。自尊心、高慢、高まりゆく願望は、何も女性の姿のみにあてはめられるわけではない。男性（夫）もまた不遜な要求者〔＝督促者〕の姿で登場する。後の時代の漁師メルヒェンの多様なヨーロッパ・バージョンでは、妻の代わりに夫もまた貪欲者を演じる一方、一般的に人目を引くのは、ドイツ語圏バージョンにおける女性に敵対的な表象傾向である。²¹

メルヒェンの主人公と女主人公は、自分自身が落伍者である。スイスの文学研究者にしてメルヒェン研究者のマックス・リューティ（Max Lüthi, 1909-1991）は、グリムの漁師メルヒェンをこう評した。「神の力」とのつながりをもった漁師は、魔法の贈り物を「擦り付けられた者」として、ただ消極的に受け取っただけである。彼のパートナーはそれに対して、確かに最初は否定的人物として登場はするものの、世界文学に比すべき別の主人公のような（例えばマクベス、ヴァレンシュタイン、ファウスト）、隠れたまさかの肯定的特徴もまた担っている。彼らの努力（と欲求）は「大

²⁰ Vgl. Fassungen im Archiv der Arbeitsstelle „Enzyklopädie des Märchens“, Göttingen; ferner die unter ATU 555 erfaßten Texte auf der CD-ROM Europäische Märchen und Sagen. ed. H.-J. Uther. Berlin 2004 (Digitale Bibliothek 110).

²¹ たとえばスイス・ドイツ語のメルヒェン „Der Schweinehirt“ (Sutermeister, O.: Kinder- und Hausmärchen aus der Schweiz. Aarau 1869, Nr. 56)。ロシアのメルヒェン „Der verzauerte Lindenbaum“ (Löwis of Menar, A. von: Russische Volksmärchen. Jena 1914, Nr. 38)。

きく、自らを正当化する。そのために目標を見失ってしまうのだ。]²²

3. 図像的表現

この漁師メルヒェン・テキストは、1760年頃から1825年頃までのドイツのメルヒェン・テキストの中で重要な位置を占める。読者層グループはやはり、読解力〔＝識字〕不足ゆえに限定されていた。挿絵の要素はまれであり、しかも挿絵に必要な高価なプレート制作が、例えば当時の学校授業で伝統的に用いられていた、内容豊かに挿絵を施された寓話テキストと比較すると、割に合うものではなかった。²³ そのため、最初のドイツ語のテキスト、例えば匿名で出版されたヴィルヘルム・クリストフ・ギュンター (Wilhelm Christoph Günther, 1755-1826) の『口伝物語から集められた子供のメルヒェン』 (Kindermärchen aus mündlicher Erzählung gesammelt, 1782) には、挿絵がまったくなかった。この手のテキストにおいては、前世紀の民衆本や笑話本シュヴァンクでもうそうであったように、いわば主題モチーフとしてその巻を装飾する1枚の表題ビニエツトで十分なのである。例えば、ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス (Johann Karl August Musäus, 1735-1787) のまさに成果豊かな『ドイツの民間メルヒェン』 (Volksmärchen der Deutschen, 1782-1786) 等がそうである。

ユング＝シュティリング (Johann Heinrich Jung-Stilling, 1740-1817) の回想録『ハインリヒ・シュティリングの青春期』 (Heinrich Stillings Jugend, 1777) の口絵頁が、恋人同士のヨリンデとヨリンゲルを描いていることは、長編小説における挿話 (物語内物語) として挿入されたメルヒェン「ヨリンデとヨリンゲル」 (Jorinde und Joringel) の存在意義を確かに明白にはし

²² Lüthi, M.: Von dem Fischer und syner Fru. In: ders.: Volksmärchen und Volkssage. Zwei Grundformen erzählender Dichtung. Bern 1961, S. 57-61, hier 59.

²³ Vgl. Uther, H.-J.: Illustration. In: Enzyklopädie des Märchens 7. Berlin/New York 1993, 45-82.

ているが、補強されてはめ込まれたメルヒェンの挿絵を顧慮すれば特異な例である。約30年後によく先述のA・L・グリムの『子供のメルヒェン』が、大がかりで一貫性のある挿絵挿入初期の例を提示すると同時に、メルヒェン本という形姿における特筆すべき意味転換を象徴的に指し示しているのである。

3-1. 挿絵第一期（1809-1840年頃）

漁師メルヒェンには、挿絵にとって本質的と見なされうる年代順の3つの段階が定められる。第一段階はだいたい1809年から1840年までの期間であり、単独図像（Einzelbild）によって形成される。約50におよぶ漁師メルヒェン・テキストによって、この時期におけるいわゆる図像的表現が知られるようになった。画家フランケン（Maler Franken）はこの時期に、銅版画用の7枚の原画を制作した（図1）。それらはエーミール・ゲッツェ（Emil Goetze）によって彫刻され、1817年には第2版に着色されて12枚となった。その中の1枚のみが、「ハンス・ドゥーデルデ」メルヒェンに割り当てられている。図像化を誘ったのは、漁師と魚との出会いの場面であった。特に1枚の挿絵が計画されるとき、メルヒェンのストーリーを規定し、まさに反復しうる瞬間^{モメント}として、この出会いの場面が図像的形変化を誘発するのである。ここでは、銅版画（縦長サイズ）に、^{うけ}釜を手に持った1人の裸足の漁師が描写されている。彼は自身の眼差しを小さな魚に向けていて、その魚は釜のそばで彼に向かって浮遊している。背景には丘陵状の風景が識別されうる。画像の右半分中央よりには、2つの付属家屋を伴った大きめの家があり、その家は、「向こう岸にある田舎別荘」という見開き右頁のテキスト内容と合致する。表現されているのは、漁師の願いをかなえる魚との最初の出会であり、その出会いによって、田舎別荘から「明々とした部屋を持つ豪華なお城」に変化するのである。挿絵画家がこの出来事を、内陸水域の湖沼河川にて展開させている点に疑う余地はない。その見

解を促すのは、罟が河川や湖沼での漁獲用に好まれた捕獲用具であることだけではない。この表現された風景もまた、そのような見解を促す。メルヒェンのテキスト内容は、漁師が魚と明確に出会う場所を、見かけ上は未決定のままにしている。男性名詞 „der See“ あるいは女性名詞 „die See“ の方言形と見なしうる „de See“ は、「内陸水域」（男性名詞の場合）にのみならず、「海洋」（女性名詞の場合）にも関連付けられうる。とはいえ、「ヒラメ（類）」（Butt）という表現により、それがどちらなのかが明白となる。「カレイ」（Scholle）あるいは「カレイ（類）」（Flunder）という名前で知られるこのダークブラウンあるいはライトブラウンの平べったい魚は、とりわけ北海やバルト海の沿岸海域、さらにルンゲの故郷フォアポンメルン地方の海岸にも生息している。挿絵画家がテキスト内容に返し、この描写を内陸水域で展開させている理由として、以下のことが推察されよう。「海のメルヒェン」（Seemärchen）というものがこの本のコンテキストのままでは、ほとんどの読者や購入者にとって想像しがたく映り、いわゆる「陸組」（Landratten）のこのような表現の方が、より想像しやすかったのではないだろうか。

A・L・グリムの『子供のメルヒェン』（Kindermärchen）第3版（1839年）のために、フランツ・フォン・ポッツィ伯爵（Graf Franz von Pucci, 1807-1876）が、自身の初期作品に属する8つのエッチング（腐食銅版画）を寄与している（図3）。ここでもこの出来事は、広々とした海洋に設定されてはいない。ポッツィは漁師のドゥーデルデを、ナイフをベルトの中に入れて携え、岸辺の上で三段の籜やすを持った姿で示している。2つの切り株に取り巻かれ、その切り株からはまだいくつかの青々とした若枝が上方へと伸びている。その枝の1本には鳥が1羽止まっている。湖沼の向こう岸にある山々の輪郭が、遠景を構成している。つまり、後にポッツィが好んだ様式に数えられる、絵のように美しい（ピトレスクな）風景である。漁師は、湖沼の穏やかな水を見やりながら少し不機嫌に見える。彼はもう長い

こと、無駄に漁獲を待ち構えていたかのようなのである。そこから推察されるのは、ポッツィが明らかに魚と出会う前の雰囲気を描写しなかったということである。

ポッツィ以前にはすでに、発展しつつあった教科書と購読本のジャンルで、また別様の挿絵が存在していた。そのようにハインリヒ・ディトマー (Heinrich Dittmar, 1792-1866) が、グリム兄弟の漁師メルヒェンを、グリムの他のメルヒェンや伝説と共に、自身の購読本に掲載した。それが、『少女の楽しい庭 (遊歩庭園)』(Der Mägdlein Lustgarten, 1822)²⁴の中の——明らかに底意がないわけではない——「漁師メルヒェン」である。S・S・キルヒナー (S. S. Kirchner) の図案でフリードリヒ・ブザー (Friedrich Buser, 1797-1833) が彫り付けたこの銅版画は、画家フランケンのように、1人の(若い)漁師を描いている(図2)。靴を履き、ベルトを締め、すそに向かって広がっているミドル丈の衣服を身にまとい、釜を湖沼の中に投入しているような様態であり、その傍らにはウナギのような小さな魚が見受けられる。その場面は、木の葉を鬱蒼と茂らせ湖面にせり出した木々に囲まれた入江に設定されているように思われる(複数ものから識別可能)。背景には1本の道が見受けられ、そこには2人の男性の姿がある。その1人は察するに猟師であり、遠景にぼんやりと描かれた城のような建物へと続く道を歩いている。

3-2. 挿絵第二期(1840-1900年頃)

他のメルヒェンと比較すると、相当早い段階でこの漁師メルヒェンが図像化されて後、1840年頃から1900年頃の挿絵第二期が確認される。テキストに反して場面が図像的に内陸水域に設定されているのが第一期とすれば、この第二期には、図像とテキストのさらなる合致が特徴的となる。

²⁴ [Dittmar, H.:] Der Mägdlein Lustgarten. Bd. 1. Erlangen [1822], S. 381-391 (Abb. S. 381).

漁師は、そのほとんどがみすぼらしい衣服を身に着けており、海洋の岸辺に位置し、高い岩礁が背景を構成している。小さくて種別の識別不可能な魚ではなく、メルヒェンにおいても言及されている、典型的な姿の「ヒラメ」(Butt) が描かれている。風景描写がその大部分を占める牧歌的イメージの光景が、海辺か小さな岩棚の上で大波高波に乗って近づいてくるヒラメを凝視するかのような漁師を示す構図に置き換えられている。海洋も、静まり返った風はまれであり、むしろ時化である。稲妻が空中にパッと煌き、迫り来る状況を暗示している。単一挿絵が相変わらず優勢であり、部分的には1頁全体が、テキストと相補の関係で存在している。とはいえない場合、挿絵は頁の三分の一の大きさで、ペン画で作成されているものが多い。グリム・メルヒェンの中でこの漁師のメルヒェン自体は、普段はさほど代表的ではなく、グリム・メルヒェンも含むアンソロジーにおいてのみ選抜されるようである。例えばペンネームL・ヴィーシェ (L. Wiese)、いわゆる出版業者ヴィルヘルム・ランゲヴィーシェ (Wilhelm Langewiesche, 1804-1884) による『ドイツの民に萌芽し無韻にとどまらぬ子供のメルヒェン』(Kindermärchen, dem deutschen Volk entkeimt und nicht mehr ungereimt, 第2版1867年) において、この漁師メルヒェンはヨハン・バプティスト・ゾンダーラント (Johann Baptist Sonderland, 1805-1878) 作の着色された石版画リトグラフを伴っている。彼は、「赤ずきん」、「灰かぶり」、「ラプンツェル」の挿絵も製作している。さらに、フリードリヒ・ホフマン (Friedrich Hoffmann) の『子供の不思議な庭』(Der Kinder Wundergarten, 1878) や、アレクサンダー・ツィック (Alexander Zick, 1845-1907) によって造形された豪華版『子供のためのメルヒェン』(Märchen für Kinder, 1886) も出版され(図5)、カール・ザイファルト (Karl Seifart, 1821-1885) の『不思議な角笛』(Wunderhorn, 1882年) には、オイゲン・ナポレオン・ノイロイター (Eugen Napoleon Neureuther, 1806-1882) の原画に従った1頁全面挿絵が施された(図6)。その上さらに、複数の挿絵が時とし

て、主題のバリエーションを手に入れる。例えば、ルートヴィヒ・ベヒシュタインの「酢壺の中の夫と妻」である。ベヒシュタインの『メルヒェン本』(Märchenbuch, 1853)のためにルートヴィヒ・リヒター(Ludwig Lichter, 1803-1884)が作成した、小さな版型のペン画を想起させるいくつかの木版画(2版1853年、3版1857年)は、後にグリム版にも使われるようになる(図4)。グリムの原型をもとにアレクサンドル・プーシキン(Aleksandr Puškin, 1799-1837)が作り上げた詩文メルヒェン『漁師とその妻のメルヒェン』(Skazka o rybakě i rybkě, 1833)のロシア版(1868年)が、おそらく漁師メルヒェンを伴った最初の絵本であり、デュッセルドルフのアペル社(Apel & Co.)によって全部で12の着色石版画カラーリトグラフと共に装丁された。

「表現に個性的なアピール力を与える」という新しいディテールを挿入することに、挿絵はだんだんと成功してゆく。例えば、裸足の若い漁師が頭を前かがみに傾けて、うやうやしく自分の帽子を手に握りつつヒラメに挨拶するとき、その漁師はヒラメに対する謙虚な態度を獲得する。この描写はまず、グリム・メルヒェンのフランス語部分訳(1855年)に見受けられ、ベルタル(Bertall)、すなわちシャルル・アルベール・ドルノー子爵(Vicomte Charles Albert d'Arnaux, 1820-1882)によって作成されている。その繊細なタッチは、くっきりとした輪郭描写と共に、ドイツの児童書や青少年向き図書の中でも高く評価された。ほとんどの挿絵が、単にみずぼらしい小屋とその前に座る漁師の妻を描く一方で、この挿絵の背景には、漁師の妻が実際に小便壺の上に座っているのが確認される。ノイロイターは図像内図像(Bild-in-Bild)の手法を用い、それぞれのエピソード同士を芸術的にみごとに結合させた(図6)。テキストの方がむしろ従属的意味を持ち、決まり文句の最初の詩行「マンチュ・マンチュ・ティンペター[……]」と共に、個々の願望および漁師と魚との出会いのための目印として貢献している。図像真ん中に描かれた翼を持った天使像は、あらゆる部分図を凌駕マしており、主なる神のようになりたいという最後のかなわぬ

願望を象徴している。図像の進行は、メルヒェンの結末をも象徴する冒頭シーンを描いた、中央下の周縁部分から始まる。

何はともあれ、多彩なメルヒェンの諸風景全体を眺めるに、漁師メルヒェンそのものに対する関心がむしろさほどではないことがわかる。漁師メルヒェンは、あらゆる^{メディア}媒体において代表的には登場していない。例えば一枚絵の絵草紙や、グランツビルト（多色石版刷り装飾用カッティングシート）、グラフ雑誌（画報）、幻灯のガラス製スライドのモチーフ、さらには特別子供のために考えられたメルヒェン本やおもちゃにもあまり登場しない。それは第一に、主題設定と方言仕立てに起因するといえよう。酢壺の中の夫と妻のベヒシュタイン版は、彼自身のテキスト以外はなんら特別の影響も及ぼさなかったし、教科書や購読本としてはたった一度しか確認されなかった。²⁵

3-3. 挿絵第三期（1900年頃-現在）

漁師メルヒェンの図像媒体への適応の第三段階は、挿絵という表象の多様性によって特徴付けられる。この第三段階は19世紀から20世紀への世紀転換期ごろ始まり、今日なお続いている。ここでもいえるのは、漁師メルヒェンが新しい^{メディア}媒体——たとえばデパート製絵本、メルヒェン雑誌、パズル、ゲーム用カード「カルテット」、ことばカード（Bildlerlotto）、スライド・シリーズ、ビデオ映画、DVD等——に採用されることがまれであるということである。広告用コレクションカード（Sammelbild）においても漁師メルヒェンは、比較的遅く登場する（1905年、1919年、1939年）。²⁶ 同様のことが、映画への適応にも見受けられる（最初は1985年）。²⁷ この漁師

²⁵ Tomkowiak, I.: Lesebuchgeschichten. Erzählstoffe in Schullesebüchern 1770-1920. Berlin/ New York 1993, S. 250.

²⁶ これ以降の西暦（成立年）に関しては、挿絵史年表を参照のこと。

²⁷ Schmitt, C.: Adaptationen klassischer Märchen im Kinder- und Familienfernsehen. Eine volkshundlich-filmwissenschaftliche Dokumentation und genrespezifische Analyse der in den

メルヒェンはそれにもかかわらず、子供（児童）や青少年用書籍用の挿絵としては比較的コンスタントに見いだされ²⁸、それは挿絵付きメルヒェン・テキストにおいも同様である。そしてたいていの場合このメルヒェンは、標準ドイツ語に変換されていた（例えば1981年、1993年）。さらにその著者として挙がるのはルンゲである（例えば1984年）。グリム兄弟という名は、明らかな宣伝効果を有するにもかかわらず、ほとんど挙がらない（例えば1984年）。その理由に関わりそうなことは、この著作権が疑念の余地なくルンゲにあるということである。²⁹ 著名な画家や女性画家たちが、この漁師メルヒェンを図像として造形化した。その中には、オットー・ウベローデ（Otto Ubbelohde, 1867-1922）の1907年作品（図8）、ドーラ・ポルスター（Dora Polster, 1884-1958）の1911年作品、パウル・ハイ（Paul Hey, 1867-1952）の1919年、1939年作品（図11）、ルート・コーザー＝ミヒャエルス（Ruth Koser-Michaëls, 1896-1968）の1937年作品、モーリス・センダック（Maurice Sendak, 1928-2012）の1973年作品、ジョン・ハウ（John Howe, 1957-）の1983年作品（図13）がある。グリム・メルヒェン部分訳の英語版（1853年、1930年）、スペイン語版（1918年）、デンマーク語版（1920年）、米語版（1944年、1955年）では、漁師メルヒェンが初期の版とは異なる形でも見受けられる。ほとんどの挿絵は、漁師とヒラメの主題的シーンを示している。とりわけ大人のために、漁師メルヒェンをたいてい単独テキストとして、あるいはもう1つのルンゲ・メルヒェン「ネズ木の話」とセットで集録している愛書家向けの版が考案された。これらの版は、1920年頃から存在する。挿絵はテキストに対置され、テキストと同じだけの場所を取る。挙げ

achtziger Jahren von den westdeutschen Fernsehanstalten gesendeten Märchenadaptionen mit einer Statistik aller Ausstrahlungen seit 1954. Frankfurt am Main 1993 (Nr. 159).

²⁸ Vgl. aber auch die bei A. Klotz (Kinder- und Jugendliteratur in Deutschland 1840-1950. Bd. 1-6. Stuttgart u.a. 1990ff.) verzeichneten Ausgaben.

²⁹ その他のグリム・メルヒェンではこの現象は見受けられない。とはいえ「ヨリンデとヨリンゲル」は、ハインリヒ・ユンゲル・ショティリングの着想によるグリム・メルヒェン第69番目の話という看板をかかげている。

られるべきは例えば、1914年（刊行1920年、複製1986年）のマルクス・ベーマー（Marcus Behmer, 1879-1958）によって作成され着色された7つのエッチング（図9）、エルンスト・ヴェルテンベルガー（Ernst Würtenberger, 1868-1934）の1921年作品、ゲルハルト・マルクス（Gerhard Marcks, 1889-1981）の1955年作品、そしてオットィーリエ・エーラーズ＝コルヴィッツ（Ottilie Ehlers-Kollwitz, 1900-1963）の1965年に作成された木版画である。

もしより多くの挿絵が制作可能な場合、次のシーンがとりわけ頻繁に描かれる。1）小屋の前の漁師の妻（と漁師）、2）漁師とヒラメ、3）女帝の前にいる漁師、4）法王にいる前の漁師、5）女帝あるいは法王としての漁師の妻。標準ドイツ語への変換と簡略化されたテキストの再現において、瑣末視された表象を認める傾向はまれではない。「小便壺」は、古い小屋か古いポットとなっている（1981年作品、1984年作品）。妻の夫への要請が、ことばの選択においては表現をやわらげられて再話されたため、妻の像がオリジナルと比べてそんなにネガティブではない。通例となった醜い特徴の視覚化については、支配的なパートナーとしての漁師の妻の表象が、時としてグロテスクに歪められてしまった。例えば、女性の挿絵画家ルイーゼ・ノイベルト（Luise Neubert, 1926-2009）の1987年作品（図14）のみならず、男性挿絵画家のマルクス・ベーマー（Marcus Behmer, 1879-1958）の1920年作品（図9）、ヴェルナー・ルフト（Werner Luft, 1929-2005）の1943年作品、ニコラウス・ハイデルバッハ（Nikolaus Heidelbach, 1955-）の1995年作品によっても同様であった。テキストの意味内容は、挿絵への置き換えあるいは解釈において、自身の等価性を見いだす。長い鼻、髪の毛のまげ、ひよろ長く気難しそうな顔、尖った指の爪、弱々しい両の手。これらが、身体の他の部分とは不釣り合いに大きく描かれている。漁師の妻はその身振り手振りにより、疑う余地なく否定的人物として特徴付けられており、彼女は自らの傲慢さで社会的規範というものに異議を唱えている。幾人かの女性や男性の画家たちは、漁師の妻を例えば家

事好きな主婦や糸紬をする老女として描いたとき（1907年作品、1943年作品）、えてして人物を中性化した。また、漁師夫婦の年齢は変わり得る。諸々の挿絵においては、中年や高齢の夫婦と同様に若い夫婦も描かれている。それとは反対に、漁師の特徴付けは一義的である。つまりほとんどの挿絵で、1人の寄る辺ない、自分の妻の度を超高まった願望に対して無力な夫の印象を表現している。とりわけ印象深く成功しているのはジョン・ハウの1984年作品である（図13）。画面の上半分には釣りをしている漁師が描かれ、その漁師は常に、通常の尺度を超え、二か所に指輪をはめている妻の手の親指と人差し指で挟まれることにより、彼女のオブジェと化している。

他の挿絵モチーフは、最終的に自身の傲慢に挫折すべき運命にある、不満足な妻のその都度のテキスト内容を強調している。堂々とした漁師の妻、女帝あるいは女教皇の姿が描かれており、その周りを延臣や枢機卿会が取り囲み、舞台というものが豪華にしつらえられている。延臣や枢機卿会ではなく、上昇線を描いた複数のろうそくに妻が囲まれるかたちで、時としては様式化もされている（1911年作品、1972年作品）。この古い宗教的図像トポスは、妻の崇高さ、ひいては神聖さを象徴的に予示しているのである。漁師が隷属した態度で、恐怖に満ちて妻を見上げつつ、慣ない環境で居心地悪さを合図している一方で、妻はたった1人、自身の大きさをゆえにセッティングからそびえたっている。

* * *

要約すると、ルンゲのテキストが同時代のメルヒェン^{コレクション}収集に、瞬く間に受け入れられたということが出来る。このメルヒェンが、これまでジャンルの模範と見なされてきたフランスの妖精メルヒェンとまったく関わりがないことがその原因だとしたら、それはテーマ（主題）構成の出来栄の良さゆえだったのだろうか。さらに方言テキストとして刷新的に提供されたため、対話の多い口頭朗読を思い起こさせることが深い感動を与えた

というのだろうか。場合によっては、個別でなら解明されえないこれらの諸要素すべてが、ある種の役割を演じていたのだ。願望の際限なさという素材の魅力は、他のメルヒェンではこの漁師メルヒェンほど顕著には感じられない。そして諸々の挿絵画家は、メルヒェンの挿絵の歴史の経過の中で、この「メッセージ」を適切に、しかしながらまた繰り返し新しいバリエーションの中で仲介することに成功した。この実情と技巧的なストーリーの導きが、漁師とその妻のメルヒェンを、今日における著名なメルヒェンにすることに貢献したのかもしれない。方言テキストであるのにもかかわらず、ストーリーの担い手が子供ではなく大人の夫婦であるにもかかわらず、である。方言テキストの中においても、この漁師メルヒェンは例外的な位置付けとなっている。というのもこれ以外の民間伝承では、そのような大衆化が通常は一度も成功していないか、ウサギとハリネズミの徒競走のメルヒェンの例でもよくわかるように、標準ドイツ語への書き換えでのみ知られたからである。

【付属資料】「漁師とその妻」挿絵史年表（1809—1998）

この資料は、筆者ウターの挿絵資料コレクションを使用して作成されたものであり、初出年で表示されている。グリム兄弟とルートヴィヒ・ベヒシュタインの版が不完全なまま記録されている。もちろんこれは、グリム兄弟においてもルートヴィヒ・ベヒシュタインのもとでも、19世紀のメルヒェンがアンソロジーに集録されたり挿絵を施されるのはまれであったということを出発点としている。ヴォルフガング・ブリュックナー氏（ヴェルツブルク）、レナーテ・ゴルミッツ氏（ベルリン）、ギュンター・ロット氏（ウェリコン）、ジョン・ノイマン氏（ハンブルク）のご厚意に感謝する。（書誌情報のため、原文ドイツ語のまま掲載する。下線を施したものは、後に掲載する図像の出典情報であり、図像番号を末尾に記している）

- 1809 Hanns Dudeldee. In: Grimm, Albert Ludewig: Kindermährchen. Mit Kupfern. Heidelberg [1809]. „Franken“ (Märchenbuch). (図 1)
- 1822 [Dithmar, Heinrich] Der Mägdlein Lustgarten. Erster Theil. Mit neun Kupfern. Erlangen [1822]. S.S. Kirchner/F. Buser (Schullesebuch). (図 2)
- 1839 Hanns Dudeldee. In: Grimm, Albert Ludwig: Kindermährchen. Heidelberg 3. Aufl. 1839. Franz Graf von Pocci (Märchenbuch). (図 3)
- 1844 Wiese, L. (d.i. Wilhelm Langewiesche): Kindermärchen. Barmen [1844] (2. Aufl. Elberfeld 1867). Johann Baptist Sonderland. (Märchenbuch).
- 1853 Ludwig Bechstein's Märchenbuch. Leipzig 1853. (2 Holzschnitte) Ludwig Richter. 1 weiterer Holzschnitt findet sich in der Ausg. 1857 (Märchenbuch).
- 1853 Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. London 1853. Edward H. Wehnert. (Märchenbuch).
- 1855 Contes choisis des frères Grimm. Paris 1855. Bertall (i.e. Charles Albert Vicomte d'Arnoux). (Märchenbuch).
- 1857 Mann und Frau im Essigkrug, In: Ludwig Bechstein's Märchenbuch. Leipzig 1857. Ludwig Richter 3 Holzschnitte. (Märchenbuch). (図 4)
- 1868 [Puschkin, A. S.: Das Märchen vom Fischer und dem Fischlein]. Skazka o rybakě i rybkě, soč. na motiv' skazki A. S. Puškina. Sankt Petersburg (1868). Farblithographien gedruckt bei Apel & Co., Düsseldorf. (Märchenbuch).
- 1874 Hofmann, F. (ed.): Der Kinder Wundergarten. Leipzig 1874 (21. Aufl. 1890). Carl von Binzner. (Märchenbuch).
- 1882 Seifart, K. (ed.): Der Wunderborn. Stuttgart 1882. Eugen Napoleon Neureuther. (Märchenbuch). (図 6)
- 1886 E., M. (ed.): Märchen für Kinder. Berlin 1886. Alexander Zick. (Märchenbuch). (図 5)
- 1894 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. München [1894]. Hermann Vogel. (Märchenbuch).

- 1903 [Brüder Grimm:] Märchen. Stuttgart/Berlin/Leipzig 1903 (12.-16. Tsd. 1941). Robert Weise. (Märchenbuch).
- 1905 Der Fischer und seine Frau. Liebig Serie 639. (6 Reklamesammelbilder). (図 7)
- 1907 Grimm, J. und W.: Kinder- und Hausmärchen 1-3. ed. R. Riemann. Leipzig 1907-1909. Otto Ubbelohde. (Märchenbuch). (図 8)
- 1910 Gellert, Georg (ed.): Im Zauberland der Märchen. Berlin 1910. Paul Hey. (Märchenbuch).
- 1911 Grimm, J. und W.: Deutsche Märchen. ed. M. Thilo-Luyken. Ebenhausen 1911. Dora Polster. (Märchenbuch).
- 1912 Grimm, J. und W.: Kinder- und Hausmärchen. Stuttgart 1894. Philipp Grotjohann. (Märchenbuch).
- 1914 Von dem Fischer un syner Fru. Berlin 1914. Marcus Behmer. (Originalradierungen).
- 1918 Grimm, J. und W.: Cuentos. Madrid 1918. (Märchenbuch).
- 1918 Deutsche Märchen, erzählt von den Brüdern Grimm. Berlin [1918]. Leopold von Kalckreuth. (Märchenbuch).
- 1919 Gartmann Schokolade. (Reklamesammelbild).
- 1920 Von dem Fischer un syner Fru. Ein Märchen. Leipzig [1920]. Marcus Behmer. (Einzelausgabe). (図 9)
- 1919 Gellert, G.: Im Zauberland der Märchen. Berlin [1919]. Paul Hey. (Märchenbuch).
- 1920 Grims eventyr. ed. M. Markussen. Kop./Oslo s.a. 5. Aufl. [ca. 1920]. Axel Mathiesen. (Märchenbuch).
- 1921 Kinder- und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm. Berlin 1921. Franz Staassen (Federzeichnungen).
- 1921 Das Märchen von dem Fischer un syner Fru. Bern 1921. Ernst Württenberger

(Holzschnitte). (Einzelausgabe).

1922 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Berlin [1922]. Max Wulff. (Märchenbuch).

1923 Grimms Märchenschatz. Berlin-Grunewald 1923. Gustav Tenggren. (Märchenbuch).

1923 Von dem Fischer un syne Fru. München (1923). Richard Dreher. 10 Tafeln unter Passepartout. (Einzelausgabe).

1923 Puschkin, Alexander: Das goldene Fischlein (Skazka o rybakě u rybkě). Der König Soltan. Das goldene Hähnchen. Dt. Übers. von E. Walter. Berlin [1923]. Mit farb. Abb.en. (Märchenbuch).

1925 Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. ed. M. Elster. Berlin 1925. Erich Schröder. (Märchenbuch).

1928 Runge, Philipp Otto: Von dem Machandelboom. Von dem Fischer un syner Fru. Zwei plattdeutsche Märchen. Berlin [1928]. Klaus Richter. (Märchenbuch).

1930 Tales from the Brothers Grimm. London 1930. Hester Sainsbury. (Märchenbuch).

1937 (Grimm, Jacob und Wilhelm:) Märchen. Leipzig 1937. Werner Luft. (Märchenbuch).

1937 Märchen der Brüder Grimm. Stuttgart/ Zürich 1937. Ruth Koser-Michaels. (Märchenbuch).

1939 Deutsche Märchen. Hamburg [1939]. Paul Hey. (Zigaretten-sammelbilder).
(図10) (図11)

1941 (Grimm, Jacob und Wilhelm:) Märchen. Ein Buch der Deutschen. Berlin [1941]. Lizzie Hosäus. (Märchenbuch).

1944 Runge, P. O.: Die Märchen. Wedel (1944). Felix Timmermans. (Märchenbuch).

1944 Grimm's Fairy Tales. Melbourne 1944. Harry G.Theaker. (Märchenbuch).

- 1949 Puschkin, Alexander: Die Geschichte vom Fischer und dem Fischlein. Dt. Nachdichtung von Gerty Rahl. Bukarest 1949. I. Bilibin. (Einzelausgabe).
- 1954 Oblate.
- 1955 Von dem Fischer vn syner Frv. Ein Märchen. Hamburg (1955). Gerhard Marcks. Holzschnitte. (Einzelausgabe).
- 1955 Grimm's FairyTales. NewYork 1955. Fritz Kredel. (Märchenbuch). (図12)
- 1956 Die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Berlin 1956. Karl Fischer. (Märchenbuch).
- 1956 Grimms Märchen. Bayreuth 1956. Gisela Werner. (Märchenbuch).
- 1958 Puschkin, Alexander: Vom Fischer und dem Fischlein. Übertr. von Johannes von Guenther. Warszawa (1958). Zofia Fijalkowska. (Einzelausgabe).
- 1959 Brüder Grimm: Vom Fischer und seiner Frau. Märchenbuchfilm 2. Kassel 1959. Egon Tresckow. (Einzelausgabe).
- 1962 Brüder Grimm: Kinder-Märchen. Stuttgart (1962). Nikolaus Plump. (Märchenbuch).
- 1962 Von dem Fischer un syner Fru. Ein Märchen. Nacherzählt. Berlin 1962. Hans-Joachim Burgert. (Einzelausgabe).
- 1965 Von dem un syne(r) Fru. Ein Märchen. Berlin 1965. Ottilie Ehlers-Kollwitz. Holzschnitte. (Einzelausgabe).
- 1968 Lackbild Nr. 1212 VEB-Postkarten-Verlag. (Oblate).
- 1969 Vom Fischer und seiner Frau. Ein Märchen der Brüder Grimm. Bearb. von Heinrich Maria Denneborg. Zürich/Freiburg im Br. 1969. Katrin Brandt. (Einzelausgabe).
- 1971 Vom Fischer und seiner Frau. Ein Märchen der Brüder Grimm. München/Hamburg 1971. Erich Fuchs. (Einzelausgabe).
- 1972 Die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Berlin 1972. Werner Klemke. (Märchenbuch).

- 1973 Märchen der Brüder Grimm. Ausgewählt von Lore Segal und Maurice Sendak. ed. William Engvick. Zürich 1974. Maurice Sendak. (Märchenbuch).
- 1973 Auf des Hechtes Geheiß. Russisches Volksmärchen [Graf Alexej Tolstoj]. DDR. (6 Briefmarken). Gerhard Bläser.
- 1974 Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Stuttgart [1974]. Heiner Rotfuchs. (Märchenbuch).
- 1976 Bussi Bär Nr. 1. Zug 1976. Walter Neugebauer. (Märchenzeitschrift).
- 1976 Die schönsten Märchen der Welt zum Sammeln. Nr. 6. Hamburg 1976. (Märchenzeitschrift).
- 1978 Brüder Grimm: Von dem Fischer und seiner Frau. Zürich/München 1978. Monika Laimgruber. (Einzelausgabe).
- 1980 Europa 289. (Schallplattenhülle).
- 1981 Von dem Fischer und seiner Frau. Nach Grimms Märchen neu erzählt von Grete Janus Hertz. Hamburg 1981. Iben Clante. (Einzelausgabe).
- 1983 Runge, Philipp Otto: Von dem Fischer und seiner Frau. Aus dem Niederl. [sic!] von Gertraud Middelhouwe. Köln 1983. John Howe. (Einzelausgabe). (☒ 13)
- 1983 Vom Fischer und seiner Frau. Märchen der Brüder Grimm. Ein Bilderbeschäftigungsbuch. Niederwiesa 1983. Dieter Müller. (Einzelausgabe).
- 1984 Grimmige Märchen. München 1984. Heinz Langer. (Märchenkarikaturen).
- 1984 Runge, Philipp Otto: Von den Fischer un syne fru. Von dem Mahandel Bohm. Nachw. Siegfried A. Neumann. Rostock 1984 (Hamburg 1984). Horst Hussel (Märchenbuch).
- 1984 Grimm, Jacob und Wilhelm: Vom Fischer und seiner Frau. Berlin 1984/ Stuttgart 1984 (2. Aufl. 1985). Rainer Sacher. (Einzelausgabe).
- 1985 Hänsel und Gretel. Die schönsten Märchen der Gebrüder Grimm. Erlangen 1985. Jean Giannini. (Kaufhausbilderbuch).

- 1985 Michael Mathias Precht (Aquarell).
- 1986 Mein großes Märchenbuch. Rastatt 1986. Jordi Busquet.
- 1987 Das grosse Märchenbuch. ed. C. Strich. Zürich 1987. (unbekannter Illustrator).
- 1987 Luise Neubert (Scherenschnitt). (図14)
- 1987 Lipinsky, Georg: Von dem Fischer un syner fru. Ein Märchen, überliefert von Philipp Otto Runge, wiedergegeben nach der 5. Aufl. der „Kinder- und Hausmärchen“ der Brüder Grimm von 1840. Mit 20 vierf. Collagen. Eschbach 1987. Georg Lipinsky. (Einzelausgabe).
- 1989 Brüder Grimm: Der Fischer und seine Frau. München u.a. 1989. Alan Marks. (Einzelausgabe).
- 1989 Das Märchen vom Fischer und seiner Frau. Zollikon b. Zürich. Johannes Lebek. Holzstiche. (Einzelausgabe).
- 1993 Runge, Philipp Otto: Vom Fischer und seiner Frau. Hamburg 1993. Peter Knorr. (Einzelausgabe).
- 1997 Papiertheater INVISUS. Von den Fischer un siene Fru. Bühnenbilder Birgit Hampel. (Papiertheater).
- 1997 Vom Fischer und seiner Frau. Deutschland (Europa-Briefmarke [!]). Ernst Kößlinger.
- 1998 Von dem Fischer un syner Fru. Niedernjesa [1998]. Georg Lipinsky. (Postkarte).
- 1999 Deutsche Apotheker Zeitung Gesundheitsministerin Fischer. (Karikatur).

【挿絵コレクション】

詳細情報は先の挿絵史年表に記されている。ウター画像資料館ゲッティンゲン (Bildarchiv Uther, Göttingen) にすべて所蔵されていることを付言しておく。

図1. フランケン (1809)

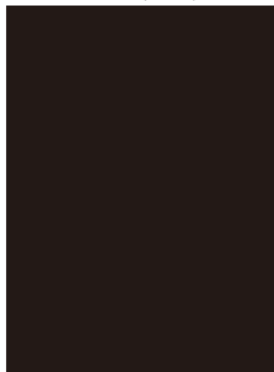


図2. S・S・キルヒナー (1822)

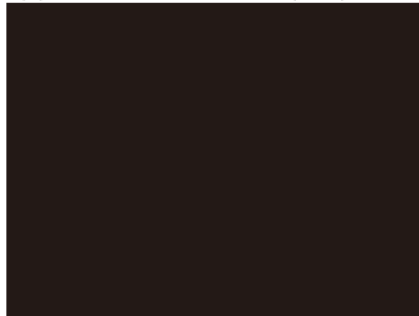


図3. フランツ・フォン・ポッツィ (1839)

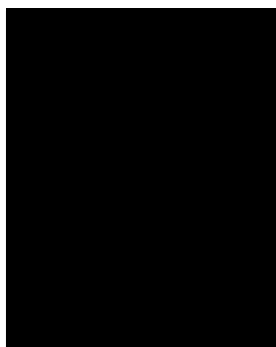


図4. ルートヴィヒ・リヒター (1857)

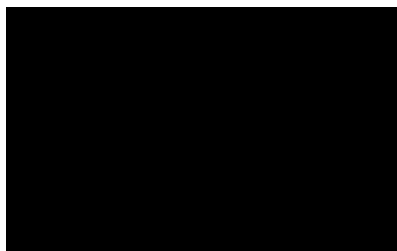


図5. アレクサンダー・ツイック
(1886)



図6. オイゲン・ナポレオン・ノイ
ロイター (1882)

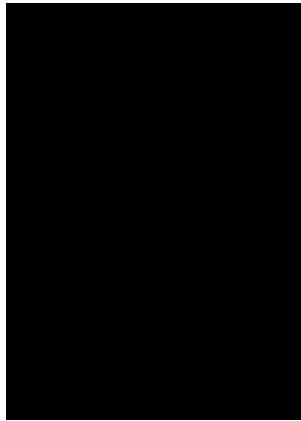


図7. リービヒ社の肉エキス商品の
コレクションカード (1905)

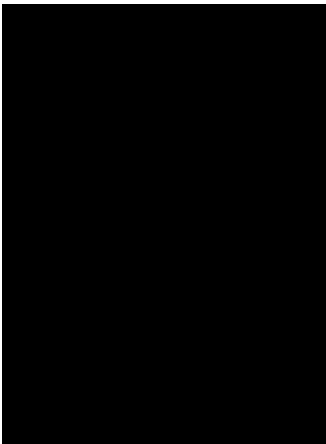


図8. オットー・ウベローデ (1907)

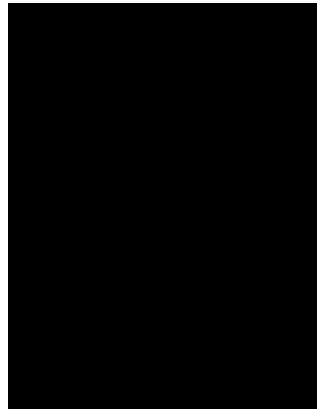


図9. マルクス・ペーマー (1920)



図10. パウル・ハイ (1939)

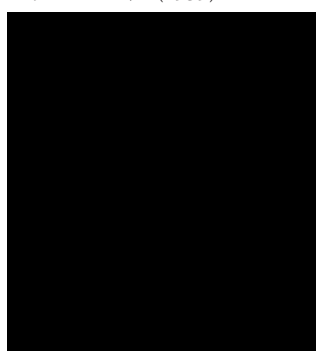


図11. パウル・ハイ (1939)

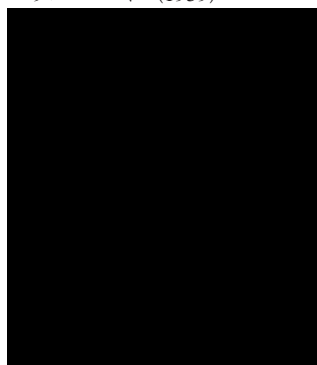


図12. フリッツ・クレーデル (1955)

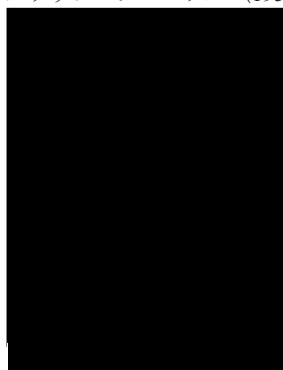


図13. ジョン・ハウ (1983)

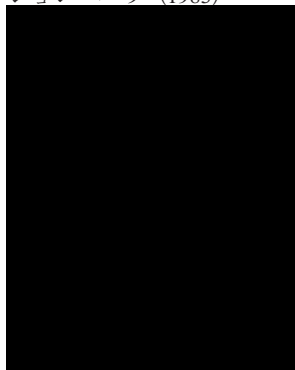
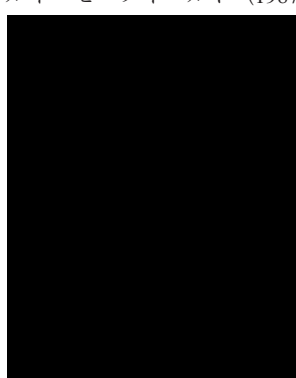


図14. ルイーゼ・ノイベルト (1987)



【3つのテキスト】

左：ビュッシング（1812年）、中央：グリム（第1版1812年）、右：グリム（第7版1857年）

58. Von den Fischer un syne Fru.	19. Von den Fischer und siine Fru	19. Von dem Fischer un syner Fru
<p>Dar was mal eens een Fischer un syne Fru, de wahnten tosamhen in'n P...pott, dicht an de See - un de Fischer ging alle Dage hen, un angelt. So ging, un gin he hen, lange Tyd. –</p>	<p>Daar was mal eens een Fischer un siine Fru, de waanten tosamhen in' n Pispott, dicht an de See - un de Fischer ging alle Dage hen un angelt, un ging he hen lange Tid.</p>	<p>Dar wöör maal eens en Fischer un syne Fru, de waanden tosamhen in'n Pißputt, dicht an der See, un de Fischer güng alle Dage hen un angeld un he angeld un angeld.</p>
<p>Dar satt he eens an'n See by de Angel un sach in dat blanke Water, un sach un sach jümmer an de Angel - dar ging de Angel to Grunde deep ünner - un as he se heruttrekt, so haalt he eenen groten Butt herun. - Dar sed de Butt to em »ik bid dy, dat du my lewen lest, ik bin keenen rechten Butt, ik bin een verwünschter Prins, sett my wedder in dat Water, un laat my swimmen.«</p>	<p>Daar satt he eens an de See bi de Angel un sach in dat blanke Water, un he sach ümmer na de Angel - daar ging de Angel to Grun'n, deep ünner, un as he se heruttrekt so haalt he eenen groten Butt herut - de Butt sed' to em »ick bidd di, dat du mi lewen lettst, ick bin keen rechte Butt, ick bin een verwünscht' Prins, sett mi wedder in dat Water un laat mi swimmen«</p>	<p>So seet he ook eens by de Angel und seeg jümmer in das blanke Water henin un he seet un seet. Do güng de Angel to Grund, deep ünner, un as he se heruphaald, so haald he enen grooten Butt heruut. Do säd de Butt to em »hör mal, Fischer, ik bidd dy, laat my lewen, ik bün keen rechten Butt, ik bün'n verwünschten Prins. Wat helpt dy dat, dat du my doot maakst? i würr dy doch nich recht smeecken sett my wedder in dat Water un laat my swimmen.«</p>
<p>»Nu - sed de Mann - du bruckst nich so veele Worde to maken, eenen Butt de spreken kann, häd ik do woll swimmen laten.«</p>	<p>Nu, sed' de Mann, du brukst nich so veele Woord' to maken, eenen Butt, de spreken kan, hadd ick doch woll swimmen laten.</p>	<p>»Nu.« säd de Mann, »du brukst nich so veel Wöörd to maken, eenen Butt, de spreken kann, hadd ik doch wol swimmen laten.«</p>
<p>Dar sett he em wedder in dat Wader, un de Butt ging furt weg to Grunde un leet eenen langen Strichen Bloot hinner si.</p>	<p>Daar sett' he en wedder in dat Water, un de Butt ging fuurts weg to Grun'n un leet eenen langen Stripen Bloot hinne sich.</p>	<p>Mit des sett' he em wedder in dat blanke Water, do güng de Butt to Grund und leet enen langen Strypen Bloot achter sik.</p>
<p>De Mann awerst ging to syne Fru in'n P...pott, un vortellt eer, dat he eenen Butt fangen häd, de häd to em seyde, he wer een verwünschter Prins, dar häd he em wedder swimmen laten. »Hest du dy den nix wünsch't?« sed de Fru.</p>	<p>De Mann averst ging to siine Fru in'n Pispott un vertelt eer, dat he eenen Butt fangen hadd, de hadd to em segt, he weer een verwünscht' Prins, doon hadd he em wedder swimmen laten. »Hest du di den nix wünsch't?« sed' de Fru.</p>	<p>So stünn de Fischer up un güng nach syne Fru in'n Pißputt. »Mann.« säd de Fru, »hest du hüüt niks fungen?« »Ne.« säd de Mann, »ik füng enen Butt, de säd, he wöör en verwünschten Prins, da hebb ik em wedder swimmen laten.« »Hest du dy denn niks wünschd?« söd de Fru.</p>
<p>»Nee - sed de Mann - wat schull ik my wünschen?« »Ach - sed de Fru - dat is de ävel, jümmer in P...pott do wanan, dat is so stinkig un drackig hier. Ga du no hen, un wünsch ne lütte Hütt.«</p>	<p>»Nee! sed de Mann, wat sull ick mi wünschen?« »Ach! sed' de Fru, dat is doch ävel, ümmer in'n Pispott to wanan, dat is so stinkig un dreckig hier, ga du noch hen un wünsch uns ne lütte Hütt.«</p>	<p>»Ne.« säd de Mann, »wat schull ick my wünschen?« »Ach.« säd de Fru, »dat is doch ävel, hyr man jümmer in'n Pißputt to waanen, dat stinkt un is so eeklig du haddst uns doch ene lütje Hütt wünschen kunnst.</p>
<p><i>Aus: Büsching, J. G.: Volks-Sagen, Märchen und Legenden. Leipzig 1812, Nr. 58.</i></p>	<p><i>Aus: Brüder Grimm: Kinder- und Haus-Märchen. Berlin 1812, Nr. 19.</i></p>	<p><i>Aus: Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen I. Berlin 1857, Nr. 19.</i></p>

【出典紹介】

本論考は、東洋大学文学部国際文化コミュニケーション学科「異文化を学び自文化を学ぶ」プロジェクト2018年度講演会として、2018年10月5日に東洋大学白山キャンパスにて開催された、ハンス＝ヨェルク・ウター氏 (Prof. Dr. Hans-Jörg Uther) の英語講演 „The Fishermann and His Wife“-Illustrations (1809-2000) to a folktale of the Brothers Grimm の講演報告として、講演原稿 (英語) のドイツ語原文から和訳を試みたものである。講演内容および本論考内容は、2005年に刊行された以下に記すウター氏のドイツ語論文を、同氏が2018年の当該講演のために新たに書き直したものであり、本和訳に際してもさらに改変されていることを付言しておく。

Hans-Jörg Uther : Von der Vermessenheit des Wünschens. Zum Märchen „Von den Fischer un siine Fru“. In : Arbeitskreis Bild Druck Papier. Tagungsband Ittingen 2004. Münster u.a.: Waxmann 2005, 48-70.

【著者紹介】

ハンス＝イェルク・ウター博士 (Dr. Hans-Jörg Uther, 1944-) デュイスブルク＝エッセン大学元教授 (ドイツ)、ゲッティンゲン大学『メルヒェン百科事典』研究所研究員 (『メルヒェン百科事典』編纂者)。ミュンヘン大学、ゲッティンゲン大学にて民俗学、ドイツ文学、歴史学を専攻し博士号取得。比較民話学の必読書『国際昔話話型カタログ—分類と文献目録—』を出版 (FFC、2004年)。ドイツの著名な伝承文学研究者達によって構成された『メルヒェン百科事典』編纂プロジェクトリーダーの1人であり、世界中の口承文芸の比較研究を手がける。グリム研究・伝承文学研究関連業績多数で、著書は70を超える。

拙論のドイツ語から日本語への翻訳という同僚大野寿子氏の骨の折れる作業に心からの謝意を！ (2019年1月22日、ハンス＝イェルク・ウター)